

SSS032-P18

会場:コンベンションホール

時間:5月25日 16:30-17:30

## 近畿トライアングル北部の横ずれ断層に伴う袋状埋積谷における反射法地震探査 Seismic reflection profiling across the Shufuji fault, Kinki district

戸田 茂<sup>1\*</sup>, 森岡 麻衣<sup>1</sup>, 加藤 茂弘<sup>2</sup>, 岡田 篤正<sup>3</sup>  
Shigeru Toda<sup>1\*</sup>, Mai Morioka<sup>1</sup>, Shigehiro Katoh<sup>2</sup>, Atsumasa Okada<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 愛知教育大学, <sup>2</sup> 兵庫県立人と自然の博物館, <sup>3</sup> 立命館大学 歴史都市防災研究センター -

<sup>1</sup>Aichi University of Education, <sup>2</sup>Division of Natural History, Hyogo Museum, <sup>3</sup>Ritsumeikan University Global Innovation

琵琶湖は現存する日本の湖の中で、最も古い湖であり、その起源は約 600 万年前の三重県伊賀地域まで遡ることができる (Horie, 1984)。現在の琵琶湖の北部地域には北北東 - 南南西走向の花折断層系・琵琶湖西岸活断層系および北西 - 南東走向の柳ヶ瀬断層系が分布する国内でもっとも活断層が密集する地域のひとつである (活断層研究会, 1991)。近年、これらの活断層系では、精力的に調査・研究がなされ、活動度や活動時期が明らかにされつつあり (小松原, 1999; 2002)、第四紀後期の活動性が活発である (奥村・他, 1972)。事実、近畿地方における最大内陸地震である寛文地震 (1662 年) (M7.1/4~7.6) は、これらの断層系の内、琵琶湖西岸活断層系を震源として発生したと指摘されている (萩原, 1982)。

また、琵琶湖北部地域には、これら断層系に起因すると考えられる四方を山地に囲まれたすり鉢状のような地形である袋状埋積谷が多く存在し、厚い堆積物で覆われている。

本研究では、琵琶湖北部、湖北山地の南東部に位置する集福寺断層にある袋状埋積谷を対象として極浅層反射法探査を実施した。観測は滋賀県にある近江塩津駅付近の農道 168m で行った。測定には Seismic Source 社の DAQ Link2 を使用し、展開を工夫するなどして、平均 24 重畳の記録を得た。サンプリング間隔を 0.5 ミリ秒とし、0.5 秒の記録を収録した。発震にはかけやを使用し、受振器には固有周波数 28 ヘルツのシングルチャンネルの地震計を使用した。発震・受振間隔は、ともに 1 メートルである。

ノイズレベルが低かったため、良好な反射断面が得られた。堆積層が最厚部で約 200 メートルみられ、測線中央部に東傾斜の低角の逆断層が確認できる。断層付近にグロース層がみられるため、この逆断層は現在でも活動していると考えられる。

この低角逆断層と袋状埋積谷との関係、そして、横ずれ断層である集福寺断層との関係について、ポスターにて議論する。

キーワード: 反射法地震探査, 集福寺断層, 袋状埋積谷

Keywords: Seismic Reflection Survey, Shufukuji Fault